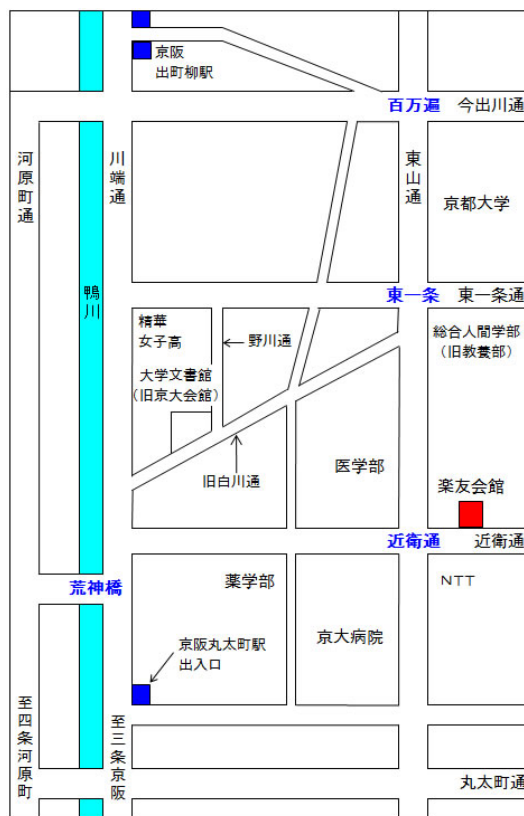


インド思想史学会 第22回学術大会 プログラムと発表要旨

開催日：2015年12月19日（土）

会 場：京都大学 楽友会館

京都市左京区吉田二本松町 TEL: 075-753-7603



〒606-8501

京都市左京区吉田本町 京都大学人文科学研究所気付
インド思想史学会事務局

TEL: 075-753-6949 (藤井) / 2460 (横地)

E-mail: hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp

http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~hit/

本状は郵便での送付に先立ってメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない会員の方には、メールアドレスが未登録ですので登録をお願いします（本文にお名前を書いたメールを事務局 hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp にお送りくださるだけで結構です）。

インド思想史学会 第22回(2015年度)学術大会のご案内

インド思想史学会会長 井狩彌介

インド思想史学会第22回学術大会を下記の通り開催いたします。
皆様、どうか万障お繰り合わせの上ご参加ください。

記

開催日 2015年12月19日(土)

(昨年とは開始時刻が違いますのでご注意ください。)

会 場 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室

(理事会 12:00 - 13:00 京都大学 楽友会館 2階 会議室5)

参加受付 13:00 - 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室前

参加費：1000円 懇親会費：3000円

研究発表者および発表題目

13:30 - 14:20 齊藤 茜(九州大学・日本学術振興会特別研究員)

“Maṇḍanamiśra’s Discussion on plurality (*bheda*) in the *Brahmasiddhi*”

14:20 - 15:10 片岡 啓(九州大学大学院・准教授)

「tadvat と apohavat

限定関係をめぐるディグナーガとクマーリラの一議論」

—— 休憩 ——

15:30 - 16:20 山田 智輝(大阪大学大学院・招聘研究員)

「R̥gveda における河川を巡って」

16:20 - 17:10 中村 史(小樽商科大学・教授)

「語り物『マハーバーラタ』の構想・技巧・異伝

—「七仙人の名乗り」を例として—

総会 17:10 - 17:50 (発表終了後、引き続き2階 会議・講演室で)

懇親会 18:00 - 20:00 楽友会館 1階 食堂にて

Name: Akane Saito

Institution: Kyushu University (Japan)

Status: JSPS-Fellow

Title: Maṇḍanamiśra's Discussion on plurality (*bheda*) in the *Brahmasiddhi*

Area: Indian Philosophy

Contents:

Maṇḍanamiśra, a great philosopher in medieval India, discussed plurality (*bheda*) in great detail in his *Brahmasiddhi*. Maṇḍana's standpoint in this work is that direct perception (*pratyakṣa*) functions as the positive definition (*vidhi*) and always precedes the exclusion (*vyavaccheda*) in our cognition. Namely, every phase of perception precedes positively. We can say that Maṇḍana's logic, which is essentially positive, is in clear contrast with the *apoha* theory in which the grasping of the object starts with exclusion. In the second chapter of the *Brahmasiddhi*, the discussion on direct perception brings his focus into the criticism of plurality, and he concludes that the nature of the entity cannot be the plurality (*bheda*) or discrimination (*vyāvṛtti*) from the others, which we can see in the verses II 5–9 of Kuppaswami Sastri's edition (pp.47–56).

In brief, Maṇḍana's discussion proceeds as follows: the nature of the entity is not plurality (v.5), the dependence (*apekṣā*) on others is manmade, and the distinction is not essential but relational (v.6), the unitary entity has the capacity of accomplishing the complete multiplication or diversion on the basis of altogether ten reasons (v.7), the unitary entity has the plurality in a limited sense, which is authorized by the passage of "Praise of the Universal Self" in the *Ṛgveda* (v.8), and the unitary nature is the cause of the different effects (v.9).

These are closely related to the theory of error (*vibhrama* or *viparyāsa*), which, according to Maṇḍana, happens all the time in perception and is the fundamental obstacle to which we are subject, and nonetheless we can remove it and attain the truth through the process of analysis.

In this presentation, I do not focus on his doctrine of error, but shall illustrate how Maṇḍana's theory of apprehension refutes the plurality as the nature of the entity and makes a connection with his concept of error, examining the above mentioned verses of the *Brahmasiddhi*.

tadvat と apohavat

限定関係をめぐるディグナーガとクマーリラの一議論

片岡 啓

ディグナーガは普遍実在論で言う「それを持つもの」(tadvat) が具体的に何を指すのかを PS 5.8cd 以下で考察し、そのいちいちの可能性を排除していく。PS 5.10a においてディグナーガは、普遍実在論者の立てる「有」の意味、すなわち、〈有性を持つもの〉が、壺等 (ghaṭādi) という具体的な対象である場合を考察する。

クマーリラは、ディグナーガが実在論に向けたのと同じ批判方法を用いて、ディグナーガのアポーハ説を批判し返す。ちょうどディグナーガが「tadvat は具体的には何か」を問うたのと同じように、クマーリラはディグナーガに対して「apohavat は具体的には何か」を問い返す (ŚV apoha 128 以下)。そして、瓶等を想定する場合をディグナーガと同じように批判する。

本発表で取り上げる ŚV apoha 132 が対応するのは PS(V) 5.11ab である。ディグナーガの詩節は「仮に認めたとしてもそれはそうではない。ジャーティにジャーティは無いから」(upetyāpy naitaj jāter ajātitaḥ) というものである。すなわち、喩例を仮に認めたとしても、反論者の主張は成立しないというのである。有性の上に瓶性は定義上ありえない。このディグナーガの批判に対して、同じことはアポーハ論にも適用できるとクマーリラはやり返す。もしも非有の排除の上に非瓶の排除があれば、限定関係が可能となる。しかし、「それ自身 (非有の排除) の上に [非瓶の排除は] ないので」とクマーリラは指摘する。ジャーティの上にジャーティがないように、排除の上に排除はありえない。このクマーリラの詩節を服部は次のように訳出する。

ŚV apoha 132:

nātmany avidyamānatvād viśeṣo 'pohasūcakaḥ/

tasmān na tair viśeṣyatvaṃ prakṛṣṭatvena nīlavat//

服部 1975:33 : 「[asat の否定] という1つのアポーハに限定された」特殊〔である apohavat〕は、〔他のアポーハが〕自らの中に存在しないのであるから、〔他の「非壺の否定」等の〕アポーハを示すものではない。したがって、〔それは〕 nīla (青) が優勢によって〔限定されて、nīlatara, nīlatama となる例〕のように、それら〔他のアポーハ〕によって限定されない。

服部訳は次の様な構造を前提とした解釈と思われる。まず、「有」は、〈asat の否定〉を持つ特殊である apohavat を意味する。すなわち、非有の否定を持つものを意味する。しかし、他のアポーハである非壺の否定等はその特殊の上にはない。したがって、特殊が非壺の否定等を示すことはない、と。

しかし、クマーリラの考える特殊は非瓶の排除であって、非有の排除でもなければ、ましてや、服部の言う *apohavat*, すなわち、〈非有の排除を持つもの〉ではありえない。このことは註釈者が明確にしているとおりでである。また、何が何を示唆することがないのかと言え、これも註釈者が明らかにしている様に、非有の排除が非瓶（等）の排除を示唆・含意することがないのである。服部のように、〈非有の排除を持つもの〉が非壺の否定等を示唆することがないわけではない。服部の解釈は、註釈から大きくずれるものである。また、前提となっているディグナーガの議論からも外れるものである。

132cd に目を移す。服部の言う「それは」が指すのは、直前の特殊、すなわち、〈*asat* の否定を持つもの〉である。つまり、服部によれば、非瓶の排除等が〈非有の排除を持つもの〉を限定することはない、という趣旨となる。

しかし、何が何を限定することがないのかと言え、非瓶の排除が非有の排除を限定することがないのである。だからこそ、ディグナーガの言う「ジャーティの上にジャーティはないから」すなわち「有性の上に瓶性がないから」という批判が、ディグナーガにも同じように向けられうるのである。

服部訳が問題を抱えているのは明らかである。本発表では、ディグナーガの理解を再検討した上で、クマーリラの批判意図を明らかにし、さらに註釈や写本を踏まえて *ŚV* のテキストを検討することで、*ŚV apoha 132* の原文と解釈を確定したい。

(九州大学大学院人文科学研究院准教授)

Ṛgveda における河川を巡って

大阪大学大学院招聘研究員 山田智輝

Ṛgveda (RV) は紀元前 1200 年頃に、現在のパンジャブ地方周辺で編集・固定されたものと推定される。しかしながら、文献が伝える舞台背景の中心には、インド・アーリヤ人達はその地域に至る以前に半遊牧・移動生活を送っていた頃の活動域、具体的には現在のアフガニスタン周辺の丘陵やステップ地帯の記憶が反映されている。RV の記述からは、そういった世界観に基づく河川のイメージが読み取られる。

RV における河川の研究は、古くは LASSEN (1867), ZIMMER (1879) ら、比較的新しいものとしては、WITZEL (1999; 2007) により、主に固有名を持つ河川について、その所在地や語源を巡る問題を中心に数多くなされてきた。しかしながら、同文献に複数存在する河川関連語が、それぞれ文脈毎にどのように使い分けられているのかという点については、殆ど顧みられることがなかった。本発表では、同文献中の河川に関連する一般名詞、固有名詞、動詞 (*sraṇ* 「流れる」、*tar* 「渡る／渡す」等) が現れる全ての用例を対象に、「往時の人々の実生活における河川との関わり方」という点に特に着目しながら検証した結果を提示する。

同文献に言及される河川の大きな特徴として、季節によって水位を劇的に変えるという点が挙げられる。移動生活を送っていた往時のインド・アーリヤ人たちにとり、河川は移動の際に渡り越えなければならない存在だった。困難を乗り越えることが渡河に準えられたり、河川が渡河に適した水位に低下することが、Indra の功績の一つとして位置付けられること等からは、河川が「難所」としての性格も有していたことが窺える。また、彼等が東進の過程で数々の河川を渡り越えてきたことを示唆する言及も、断片的に見出される。こういった移動の過程で渡り越えてきた「通過点」としての河川は、主に *síndhu-* 「河川」、*aváni-* 「河道、河川」、*srutí-* 「道」といった語によって表される。

その一方で、人間の生活や家畜の飼育に必要な水を安定的に供給する河川は、生活上の最重要拠点としての性格も有する。河岸部での争いの様子を伝える用例も複数看取され、河川の地理的な重要性が推し量られる。理想的な生活の場としての河川は、インド・アーリヤ人達が長きに亘る移動生活の末に辿り着いた「終着点」、或いは「最初の定住地」とも見なされる。こういった河川は *nadī-* 「(多くの水を流す) 河川」の語によって表される。Sarasvatī, Sarayu 等の女性形で語られる 35 種 (GELDNER 1957 に依る) の諸河川は、固有名を持つ *nadī-* に位置付けられると考えられる。

語り物『マハーバーラタ』の構想・技巧・異伝

－「七仙人の名乗り」を例として－

(発表要旨)

中村 史
小樽商科大学

本発表は、『マハーバーラタ』を文学としてとらえる研究の一環である。『マハーバーラタ』という文献が語り物であり、文学作品であるとしてとらえるとき、同じ文献を哲学的文献あるいは思想的著作としてとらえるときは、テキストについての考え方は異なってくる場合がある。発表者に扱うことのできる範囲はあまりにも小さいが、そのような立場で考察を試みる。

発表者は以前、ボンベイ版系の1刊本・キンジャワデカル版で『マハーバーラタ』第13巻の神話・説話「七仙人の名乗り」を考察した。七仙人達が「名前」に関わる呪力、「真実」に関わる呪力双方の間で折り合いを付け、それぞれどのような仕掛けのある名乗りをするか読解・分析した。本発表では、プーナ批判版をはじめ他の幾つかの刊本で「七仙人の名乗り」がどのように読めるか比較考察する。今回はその際、「語り」「語り物」、「語り手」と「聴き手」、そして「構想」と「技巧」、「異伝」という視点を加えて読解・分析を試みる。

「七仙人の名乗り」において、七仙人達は彼らの名前を知って殺そうとする魔女を出し抜いて退治するが、これは、七仙人達がただ訳のわからないことをまくしたてて魔女を撃退するという設定ではない。語り手が、聴き手には理解できるが魔女には理解できないことになっている言語技巧を次々と披露する文学的興味・おもしろさがあるのである。

したがって、「七仙人の名乗り」はナンセンス文学的要素を持ちテキストのあり方はシビアである。しかし一方、『マハーバーラタ』は広く（また長く）語られた語り物であるので、幾つもの語りの異伝（のちに異読となる）が併存する状況があり得る。問題は語り全体の構想がどのようなものであり、語りの各部分の技巧がどのようなものであって、部分の技巧がいかにかくみに全体の構想を作り上げているか、というところにある。「七仙人の名乗り」の構想は一名前を知られれば殺される、しかし嘘をつくわけにはいかない（真実語の思想）という究極的に困難な状況において、七仙人達が言葉の表裏を使い分け、技巧を尽くして名乗りを挙げる。魔女にはナンセンスな表の意味のみ伝わり困惑する――というものである。この構想に応じた技巧の数々が語り手によって披露され、聴き手を笑わせる。「七仙人の名乗り」は、聴き手のサンスクリット語学力が相応にあるものと想定して語られている。

複数刊本を見ると、全体として名乗りの技巧の要は変わらず、異伝・細部の違いはさほど問題とならない。しかし、技巧の要が編者（あるいは写本作成者・転写者・語り手等）に理解されずに破壊されている場合がある。少なくとも『マハーバーラタ』の「七仙人の名乗り」に関しては、ボンベイ版系テキストが概して良いのではないかと考えられる。プーナ批判版や他刊本には幾つかの問題がある。これらについて具体的に述べてゆく。